

# 2026年ケミカルマテリアルジャパンに新設 ケミカル ロジスティクス ゾーン 新設のご案内

(後援) 日本タンクターミナル協会、日本危険物コンテナ協会、日本危険物倉庫協会

— 化学品物流を安全に、継続的に。危険物・保管・輸送・DXをひとつに。 —

## ゾーンの特徴

ケミカルロジスティクスゾーンは、化学品の輸送・保管・供給を一体で扱う専門展示エリアです。化学品特有の安全性・法規制・危険物対応・国際輸送の制約を前提に、単に輸送するのではなく「安全かつ継続的に運ぶ」ことを主題としています。

物流 2024 年問題による輸送力の低下、危険物倉庫の慢性的な不足、国際物流の不安定化など、化学品サプライチェーン固有の課題が顕在化する中、国内外を見ても特化した情報発信・商談の場は希少です。本ゾーンは、それらを横断的に扱う専門展示エリアとして新設し、危険化学品の対応・保管・国内外の輸送・供給・DXをつなぐ具体的で実効性のあるソリューションと、商談・対話の機会を提供します。

## 主な来場者・ニーズ

化学メーカーや商社は、危険物・法規対応や国際輸送の制約など、従来の枠組みだけでは対応が難しい課題が増えています。ケミカルロジスティクスゾーンは、こうした課題に対し、化学品物流に特化した解決策を一堂に集め、直接つなぐ場として設けられるものです。主題は、「運べるか」ではなく「安全かつ継続的に運べるか」。

### 主な来場者

- 海外輸送、危険物対応の課題を抱える SCM / 物流・国際物流
- サプライチェーンの可視化、効率化を検討する経営企画、IT / 物流 DX 部門
- 化学メーカーの物流、SCM、調達・安全 (EHS)・品質管理
- プラント、製造現場の物流担当および法務・輸出管理・コンプライアンス

## 出展対象

- 化学品陸送事業者・内航/外航タンカー事業者、港湾ケミカルターミナル
- 危険物倉庫、タンクターミナル、温調倉庫
- ISO タンクコンテナ、IBC、ドラム缶、特殊タンク、タンクローリー
- SCM SaaS・危険物コンプライアンス管理、電子 SDS、監視センサー、IoT 可視化
- 保険、法規対応コンサル

## 申込締切

5月29日(金)

(別紙ケミカルマテリアルジャパン 2026 のパンフレットをご参照ください)

## 出展申込・お問い合わせ

化学工業日報社「ケミカルマテリアル Japan」事務局 TEL: 03-3663-7936

## 化学品物流に関する業界動向

### 危険物物流、化学品保管の受け皿拡大へ

(化学工業日報 2026 年 1 月 1 日付 / 峯岸)

化学品の保管需要が増加傾向にある。中国における石化品の大增産に端を発し、国内化学メーカーが基礎化学品から高機能品への生産シフトを鮮明にするなか、これまでの既存製品の製造を取りやめるケースが増えている。工場内にはこうした製品を保管する場所が少ないため、ケミカルタンクやISOタンクコンテナを使い外部に一時貯蔵する事例が目立つ。化学品物流会社はこうした需要を取り込むため、ケミカルタンクの増設やISOタンクコンテナ、ドラム缶の荷姿で保管できる危険物屋外貯蔵所やタンクヤードを新設または拡張するなどして受け皿を拡大している。今後もこうした動きは続くものとみられる。

### コンテナデポ屋外拡張

港湾運送事業者のダイトーコーポレーション(東京都港区、浅野敦男社長)では、千葉県袖ヶ浦市にある内陸コンテナデポで危険物屋外貯蔵所を拡張する計画がある。3年前にコンテナデポを全面改装し、液体化学品の実入りタンクコンテナ約300基が保管できるスペースを設けているが、危険物の保管需要が増すとして2024年7月にデポ内に新設した危険物屋外貯蔵所を拡張させ、ドラム缶での保管を想定している。

保管需要が増えている背景には、化学メーカーがファイン品への生産シフトをここ数年でさらに強めていることが挙げられる。工場内では新たな製品を作るためこれまでの生産ラインを頻繁にチェンジし、各グレードに合わせて少量多品種生産する傾向が顕著となっており、工

### 動き出す 化学品共同輸送 / 中 化学品共同輸送 情報基盤整備が不可欠

(化学工業日報 2024 年 9 月 18 日付 / 峯岸)

化学品共同輸送の実現に不可欠なのが情報プラットフォームだ。化学各社が日常業務で使用する物流基幹システムはそれぞれ異なり、統一して標準化していくことが前提条件となる。その役割を担うのは、7月から化学品WGに加入したデロイト・トーマツコンサルティングと富士通および流通経済大学の3者。戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)で構築され、富士通が提供するスマート物流サービスの利活用がカギを握る。

3者の役割のうち、デロイト・トーマツはデータ検証と走行実験で得られた材料を基に共同輸送のルートを組み立てる。富士通は、情報基盤を提供し各社が使用するフォーマット(書式)やマスタ(台帳)、コード(分類体系)を共通化する作業を担う。流通経済大学は化学品WGの座長を務める矢野裕児教授を中心に実証で得られたデータを解析する。

SIPは、内閣府に設置された総合科学技術・イノベーション会議で分野の枠組みを超えて基礎研究から実用化までを見据えている。まさにデジタルインターネットの肝要となり得る。富士通は、SIPが定めた物流情報標準ガイドラインに則ったデータ変換・可視化サービス「ロジスティクスグロー

場内に既存製品を保管する場所が足りなくなっている。「近隣の京葉臨海コンビナートにある化学メーカー工場から、製品置き場が足りないので一時保管してほしいという依頼が多い」(ダイトー)として、今後の保管需要の獲得を見据えている。

### 輸入品小分けニーズも

輸入化学品の増加も保管需要を押し上げている。海外からバルク輸送した化学品をケミカルタンク、ISOタンクコンテナ、フレコンバッグで一時保管し容量に応じて小分け充填するケースが多い。こうした輸入品増加には、国内化学メーカーが基礎化学品を中心に製造中止することで起きる品不足やBCP(事業継続計画)対策として第2、3の供給源を確保する荷主の動きがあると見られる。タンクターミナルを運営する東洋合成工業の高浜油槽所(千葉県市川市)では「ここ数年タンクに空きがない状態が続いている。海外から輸入した酢酸エチルなどの保管が多い」とする。

24年4月から始まったドライバーの時間外労働時間を規制する「物流2024年問題」で長距離輸送が制限されたことも保管需要が増えた要因になっている。これまでのタンクローリー輸送からISOタンクコンテナとトレーラーによるストック&デリバリー方式に切り替える動きが増えたことでタンクコンテナを保管できるタンクヤードが不足している。タンクヤードは法律上の保管規制があり届け出が必要だが数は限られているため、ドラム缶やIBC(中型容器)の荷姿で保管するケースも最近は多くなっている。

国内では化学品のファインシフトが今後も進むことが確実で、物流会社はより効率的に受け皿を拡大していくことが求められる。

「ハルリンク」を2023年12月に上市している。

実証実験では、経済産業省や国土交通省の補助金を活用し、化学品専用のプラットフォームを構築する。具体的には、化学品WGメンバーの荷主企業4社および物流会社2社が使用しているコードを共通化する。

「ここが一番の難所になる。ただ、これを乗り越えれば化学業界がSIPスマート物流サービスを実装した初めての業界になる」(三菱ケミカルグループの高谷秀史購買・物流本部企画戦略部SC業務統合プロジェクトリーダー)と期待は膨らむ。

## 化学品ワーキンググループ体制 組織図

構成員: メーカー、物流事業者を中心に79企業(2024年5月末時点)

